い，この時点で小木ノ城も廃城となっている。法持寺もこれに相前後して勝見へ移ったものであろうか。

このことを踏えて百塚の構築年代を考えてみると，先述した4～6号塚が土塁を切って構築されていることや，9号塚が曲輪状遺構Ⅳを削り出していることなどから，1～10号塚に関しては曲輪状遺構がその機能を停止した後に構築されたもので，その上限は慶長六年以降と考えられよう。ただし，11～40号塚に関しては，曲輪状遺構と重複しておらず，この推測をそのままあてはめるわけにはいかない。

2. 周辺の塚について

百塚の所在する西山町から寺泊町にかけては，新潟県内においては柏崎市周辺，弥彦村周辺，長岡市の周辺部，六日町から湯沢町にかけての地域とともに塚の集中度が極めて高いところであり（戸根 1979），他の地域とは様相を異にしている。第11図は島崎川及び別山川の中・上流域の塚の分布状況であるが，性格・時代・基数に関係なくその分布傾向を模式的に示したものである。これでわかるように，その多くは曽地・西山の両丘陵から派生する尾根（先端部・頂陵部・鞍部）上に構築されており，沖積地に立地するものは2～3例を数えるにすぎない。また，集落との関係でその立地を考えると（第2図参照），集落内に存在するものはほとんどなく，集落裏手の尾根上に多いことがわかる。このことは，新潟県内の他地域の塚をみても同様な様相を呈しており（戸根 1979），集落の位置と塚の立地が密接に結びついていることを示している。ここで中世の文書にみえる当地域の集落を上げてみると，『続会津風土記』（応永二年）荻（小木）。『花前文書』（応永十八年）

第11図 周辺の塚分布図

於木（小木），乙面（乙茂）。『随心院文書』（応永三十一年）於木（小木），稲川，吉水，釜屋（釜谷）。『苗小路文書』（永享二年）上条（神条，吉川），中条（上中条，沢田），下条（龍谷，藤巻）などで，すでに中世のころよりこの地域の開発が進んでいたことがわかる。これらの集落周辺にはほぼ例外なく塚及び塚群が存在し，それも集落の出入口や旧街道に沿ったものが多い。これは，塚の性格のいかんによらず，構築者が塚自体をその後の生活の中で十分に意識して構築した結果によるものと思われる。

〔引用・参考文献〕

岡本郁栄　金子拓男　家田順一郎　高橋陽子　1977　「西古志の考古学的調査」『寺泊・出雲崎』（新潟県文化財調査年報第16）　新潟県教育委員会

金子拓男　戸根与八郎　1974①　「川治百塚第6号塚」『北越北線　埋蔵文化財調査報告書』（埋蔵文化財緊急調査報告書第2）　新潟県教育委員会

金子拓男　池田享　1974②　『寺浦百塚発掘調査報告書』（六日町文化財調査報告書第1輯）　六日町教育委員会

佐藤吉太郎　1972　『出雲崎編年史』上巻　財団法人良寛記念館

品田高志　1983　『国光の塚群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告第3）　柏崎市教育委員会

心耕学園郷土教育部　編　1926　「小木の城山」『西越郷土史』　西越郷土史編さん会

戸根与八郎　竹田陽子　1979　『狐山塚群』（国道116号線　埋蔵文化財発掘調査報告書）　新潟教育委員会

中村孝三郎　神林昭一　1970　「朝日百塚」『越路原総合調査報告書　朝日百塚・並松遺跡」　越路町教育委員会・長岡市立科学博物館

水村孝行　井上尚明　1980　『こども動物自然公園内　埋蔵文化財発掘調査報告　物見山塚群』　埼玉県教育委員会

渡辺慶治　1953　『通俗西越歴史物語』　西越村公民館